（私たちの小さな教会の、週報から）　2025 年 8 月 3 日

「今日の花」ニワセキショウは、私たちが普段目にすることが出来る花の中では、最も小さなものの一つです。庭の芝生の間で、静かにしかし強く、美しく咲いているのに気づくこともあるでしょう。私たちも小さな存在です。しかし生きている間、神様に似せて造られた人間の本当の姿を、誇り高く、現し続けて参りましょう。

人の中に神様の姿を見よう

Ⅰ．　神様の姿を確かに見ましょう　　人の姿は、神様の姿に似せて造られています。もちろん、皆様はご存知ですね。ここでいう姿とは八頭身だとか、九頭身だとか、「あなたの着物姿、とってもお似合いね」などというときの姿ではなく、人の内面性、その性質、人間性のことです。

　間違いもごまかしも一切ない、神様の御言葉である聖書は、はっきりと、人間が造られた時に、神様の姿に似せて造られたと教えています。（創　1:26, 27）　ですから人間は、神様に似た美しい性質を持っているのです。私たちはこのことをしっかりと覚えて、この理解に立って、すべての人たちとお付き合いをして行きましょう。

　他のクリスチャンたちが、人間はみな罪人だ。神の怒りと裁きの対象だと言っても、それは西欧型キリスト教の誤った「原罪」の神学によるもので、聖書は人間の罪の醜さをさらす前に、人間の美しさを「神様の姿に似せて造られた美しいもの」として、際立たせていることを、しっかり理解して、自分を見、また他人をも見て行きましょう。自分に失望せず、神様の姿を自分の中に見出だすのです。他人を嫌い見下すのではなく、その中に神様の美しさを見つけて、称賛するのです。

Ⅱ．　イエス様が人の中にご覧になった神様の姿　　イエス様も、人間の中には神様の姿が与えられていることを、その教えの中で、雄弁に語っておられます。有名な放蕩息子の譬えの中の、優しく、忍耐深く、家を捨て親を捨てて出て行った不忠実な次男坊を待ち続ける父親の姿に、神様の姿を見るようにと、イエス様は語られたのです。次男坊の姿を遠くに見つけると走り出て迎え、叱りもせず咎めもせず、ただ抱きしめて口づけし、最上の着物を着せ靴を履かせ、指輪を与え、失われたものが見つかり、死んでいた者が生き返ったのだからと、最上の子牛を屠り、盛大な歓迎会を催します。これを見た長男は憤り‥‥‥というお話は、皆さん、ご存知ですね。

　しかもイエス様は、放蕩息子の父親のような善良で優しい人物の中にだけではなく、しょうがない人間の中にも、神様のみ姿を見ておられました。イエス様は、「ああなた方は、たとえ悪い者であっても、自分の子供には良い贈り物をしようとするなら、ましてやあなた方の天の父は‥‥」と語られ、悪い人間、私たちの周りに何百人でもいる様な、ふしだらで締まりのない人間のなかにも、神様のお姿をご覧になっておられたのです。

　私たちも、私たちの隣人、日々出会う人たちの中に、神様の姿を見出しましょう。ただ蔑み、見下して嘲笑するのではなく、その人の中に神様の姿を見出だし、それを積極的に語り、認め、褒めてあげるのです。その人本人がまったく気づいていなかった、素晴らしい性質に話が及び、それを引き出し、さらに活発にさせる手助けをすることに成るかもしれません。それによって、その人が自分を見直し、新たな自分を発見し、新しい人生をやり直すきっかけになるやも知れません。あなたがその人を認め直し、新しい交友が始まるかもしれません。それは他人を生かすことになるのです。

Ⅲ．　自分の中に神の姿があったことに気づく人が現れる　　自分の不甲斐なさに落ち込んでいる人は、案外多いものです。でも、自分の中に天地を造り、さらに自分をも造ってくださった、神に似た姿があると知ったら、どんな気持ちになるでしょう。自分の大切さ、自分の本当の価値に、改めて驚くことでしょう。そして、積極的に美しく生きようという意欲もわいてきます。

そういう人の中に、神様も積極的に働いて、その人の人生がその人自身にとってだけでなく、家庭の中で、職場の中で、地域共同体の中で、大切な人、役立つ人、他人を幸せにする人と認められるようになることでしょう。そして、その人は自分の内にある神様の姿だけではなく、今自分のために働いて下さる神の力を認めることになるのです。

　私たちは人間を罪人扱いにする、西欧型キリスト教ではなく、人間を神様の姿を宿す美しいものとして見る、聖書型クリスチャンになりましょう。すべての人間が罪人であるというのも、間違いなく、聖書の教えです。しかしそれは旧約聖書をしっかり学び、救い主キリストの到来を待ち続けていた、イスラエル人向けの感覚です。すべての人は罪人であることを、積極的に語った使徒パウロも、異邦人の中での実際の人付き合いの中で、あるいは伝道の場ではそのような態度はとっていません。かえって人々の中にある美しい人間性に目を止め、まずそこに話が及ぶように心がけ、聞き手が真の神様の存在に気付くように、心を配っています。（使徒 17:16-34）